

東京美術學校校長正木直彦殿

會計主幹 本間 金之助(印)

依囑者心得

一 凡物品製作ノ代金ハ前納トシ契約ノトキ之ヲ納付スベシ

但工事三ヶ月以上ニ渉ルモノハ工事中便宜數回ニ分チ納付セ

シムルコトアルベシ

一 物品製作中依囑者ニ於テ萬止ムヲ得サルノ都合アリテ中止解約

ヲ申出ツルトキハ前納金ノ仕拂殘金ト着手中ノ材料等ハ其儘之

ヲ依囑者ヘ引渡シ依囑者ニ於テ別ニ責任ヲ負フコトナカルベシ

一 天災火難其他抗拒スベカラサル事故ニヨリ本校ニ於テ工事ヲ繼

續スルコト能ハサルトキハ前納金ノ仕拂殘金ト着手中ノ材料等

ヲ依囑者ニ引渡スニ止リ東京美術學校ニ於テ他ニ責任ヲ負フコ

トナカルベシ 又同上ノ事故ニ依リ製作物ヲ損傷シ之ヲ回復ス

ルニ製作代價ノ十分ノ一以上ノ増費ヲ要スルトキニ其十分ノ一

ニ超過スル所ノ金額ハ依囑者ニ負擔トス

一 凡工事ニ關シ製作代金ノ内ヲ以テ使用スル費途ハ東京美術學校

ニ於テ任意ニ之ヲ措辨スルモノトス

一 依囑物品竣成ノ上ハ本校ヨリ其旨ヲ依囑者ニ通知シ本校ニ於テ

之ヲ引渡スモノトス

以上

東京美術學校

契約証の方に「明治四十年」と印刷されているところから、この書式が制定された時期が分かる。これ以前については契約証、依

囑者心得ともに現存しない。これらは後述(47頁)のように昭和五年に改正され、同十年には新たに「依囑製作ニ関スル内規」が設けられる。

⑫ 皇室行事関係の依囑製作

大正、昭和期の正木校長在任中の時期は、皇室関係の依囑製作事業が盛んに行われたが、年報に記載されているように、大正四年十一月十日の御大礼(大正天皇即位式)、翌五年十一月三日の裕仁親王立太子礼の際には、本校は宮内省、東京市その他から種々の美術工芸品の製作を依頼されている。それらについては「自大正四年至五年 東京市依囑製作書類」「大正五年 宮内省依託製作書類」が現存しているので、製作の概要を知ることができる。これは第二巻に入れるべきものであるが、ここに抜粋を記しておく。

○東京市依囑 御衝立 製作費 七一六八、一七〇

製作者のうち図案 島田佳矣

衝立製作 由井彦太郎、海野清、

平田宗幸、堆朱楊成、

飯田藤次郎ほか

「奉献御衝立製作仕様書

一 御衝立 総高七尺二寸 横八尺七寸 梓并ニ足共桑地仕立

表面 桐柁目地一面ニ砂子蒔ヲナシ中央五尺ニ三尺

四寸ノ横額ニ東京市現勢地図ヲ二分一ノ縮尺ニ描

キ嵌入シ其周囲ニ扇面地紙形十五枚ニ十五区ノ名

勝ヲ撰ヒ東京市在住ノ美術工芸ノ名匠ヲシテ各自

其技術ヲ以テ表出セシメテ配置ヨク嵌入ス

裏面 金無地綴織地、漫歳楽ノ舞姿ヲ刺繡シテ貼付

ス

技術家ノ分担左ノ如シ

地図

扇面地紙形

麴町区	宮城二重橋	彫漆	堆朱	楊成
神田区	神田須田町	螺鈿	豊川	楊溪
日本橋区	日本橋魚市場	彫金	香川	勝広
京橋区	佃島	布目象嵌	宮智	一男
芝区	芝浦	磁器	加藤	陶寿
麻布区	東京天文台	木彫	竹内	久一
赤坂区	青山練兵場	牙彫	三浦	光風
四谷区	四谷見付	彫金	塚田	秀鏡
牛込区	牛込神楽坂	蒔絵	白山	松哉
小石川区	東京砲兵工廠	彫金	海野	勝珉
本郷区	東京帝国大学	木象嵌	由井	長
下谷区	上野公園	鍍金	大島	如雲
浅草区	浅草観音堂	陶磁	板谷	波山
本所区	向島	七宝	涛川	惣助
深川区	深川木場	鉦起	平田	宗幸
万歳楽刺繡		原図	小堀	鞆音

以上記載ノ外総テ図案ノ通

○同 御文机、御料紙函、御硯函 製作費三一〇円

製作者のうち図案 島田佳矣

机、函製作 星野克勤斎、伊東貞文、根岸源治郎、

柳原忠克ほか

「奉献御文机御料紙函御硯函製作仕様書

一御文机 桑木地長三尺二寸巾一尺三寸五分 脚高九寸

五分 金具赤銅台金小縁透彫

一御料紙函 桑木地長一尺一寸巾八寸八分高四寸一分 印

載台銀覆輪付

一御硯函 桑木地長八寸巾六寸七分 印載台銀覆輪付

銀製水滴 桑軸筆二本 桑軸刀子一本 桑軸

紙透一本 桑墨挾一挺添

金透シ裂地ニ蝶鳥ノ模様ヲ裂地ト同色ノ絲ヲ以テ刺繡シテ地紋

トナス 更ニ色紙形十五ヲ机甲板ニ七料紙函台表ニ五硯函台表

ニ三ニ分チテ配置ヨク排列シ之ニ東京市十五区ノ名勝ヲ撰ヒ東

京市在住ノ画家十五名ヲシテ写景セシメ之ヲ刺繡トナシ各文机

ノ甲板并ニ料紙函硯函ノ外面ニ嵌入スルコト

技術家ノ分担左ノ如シ

麴町区	靖国神社(大鳥居)	春	田中	頼璋
神田区	神田明神	夏	鎌木	清方
日本橋区	江戸橋	秋	墨	佐竹
京橋区	大根河岸(京橋ヨリ)	夏	荒木	十畝

刺繡 飯田藤次郎

芝区 山内三門（ノ雪景） 冬 小坂 芝田

麻布区 一本杉 春 墨 松林 桂月

赤坂区 氷川神社 冬 墨 村田 丹陵

四谷区 須賀神社 春 松岡 映丘

牛込区 陸軍士官学校 秋 小室 翠雲

小石川区 関口水道 夏 池上 秀畝

本郷区 聖堂（仰高門） 夏 高取 稚成

下谷区 上野清水堂（雨景） 秋 尾形 月耕

浅草区 待乳山雪景 冬 墨 荒木 探令

本所区 墨田堤（竹屋ヨリ三廻リヲ見ル 乗合船）

深川区 越中島（ノ月） 春 結城 素明

刺繍 菅原直之助

以上記載ノ外総テ図按ノ通

○元大礼使典儀部依囑 銀製花盛鉢 四個

製作費一八三〇、三六〇

製作者 図案 島田佳矣、千頭庸哉

鉢製作 東台美術会製作部（代表者宮本二七郎）

八卷於菟三、野口六三、神谷教親

台製作 芦沢鴻次

外箱 青柳謹三

紐 佐藤伊三郎、道明新兵衛

囊 女子職業学校、大村喜代次

○同 銀製網代目籠形菓子器 二〇個 製作費三三九、五三〇

製作者 山崎亀吉

○宮内省依囑 御紋付三ツ組金盃 四〇組

製作費一、三五二、七五〇

製作者 盃 平田宗幸

箱 小林休齋

○同 御紋付金銀盃 三ツ組二個、三ツ組三個 製作費一五二円

製作者 図案 小場恒吉

盃 平田宗幸、石田英一

○同 御紋付梨子地太刀掛（勅任官用） 八九個

製作費一三、七一九、八五〇

製作者 主任 白山松哉、助手 堀井政吉

木地 岩本峯藏、木地塗 古宮蓮真

蒔絵 白山松哉、堀井政吉

蒔絵助手 漆工科卒業生高野重人、古河茂一、河

面冬一、竹森好文、井ノ口徳次郎、吉田

弥太郎、松林亥三郎、井上大次郎、香川

源四郎、河野順一、吉野富雄

同科生徒鶴田恒二郎、竹村猛、三好政次、

田口啓次郎、高山光明、福沢健一、辻正

作、加藤真、高井栄四郎、北森角二、松

田権六

美術工芸品の製作は、このように本校教官のみならず外部の作家、業者が多数参加して行われた。御紋付梨子地太刀掛の蒔絵は漆

工科総掛かりで昼夜兼行の製作を行い、生徒も先輩たちとともに手伝って製作の実施勉強をした。

⑬ 大村西崖『密教発達志』の帝国学士院賞受賞

本校東洋美術史担当教授にして生徒監の大村西崖は本務の傍ら東洋古美術研究書の執筆および出版事業につとめ、大正四年には『支那美術史彫塑篇』（仏書刊行会図像部発行）を著し、次いで同七年には『密教発達志』（同前）を著した。後者は長年に亙る密教研究によりその蘊蓄を傾けて完成した大著で、出版を機に西崖は本校内外の希望者を集めて翌八年一月八日以降一年間に亙り、第一講義室で「密教美術史」の特別講演を行なった。次いで同九年五月三十日、西崖は本書により帝国学士院賞を受賞した。



帝国学士院賞を受賞した大村西崖

『東京美術学校校友会月報』第十九巻第三号にはこのことが大きく採り上げられ、まず大礼服姿の西崖の写真が口絵に掲げられ、「授賞審査要旨」が掲載された。次いで西崖の漢文「拙著蒙學士院選奨諸友投簡寄頌或張宴賀之乃賦七言廿韻以敘懷兼言謝」の一篇が載せられ、さらに「芸苑叢報」の欄には授賞式と祝賀会の模様が次のように記された。

○大村教授の學士院賞受賞 既

記の如く帝國士學院本年度第一部の學士院賞は本校の大村教授に擬せられたるが、愈々五月三日の帝國學士院部會に於て卷頭記載の要旨により授賞と決定し（五月十日官報）五月三十日午前十時より本校大講堂に於て朝野の高官名士會員參列の上、盛大なる授賞式を舉行され、席上文學博士村上專精氏は授賞の理由を説明され、大村教授は賞牌賞記及金壹千圓を滿堂の拍手裡に受領されり、教授は本校第一回の卒業生にして、博士中の博士と稱せらるゝ極少數の學者が受く可き名譽を荷はれたるは母校同窓一同の最も欣喜に堪へざる所なり。

○同上祝賀會 授賞式の夕午後五時より、豫ねて正木〔直彦〕校長、白井〔雨山〕、白濱〔徵〕、結城〔素明〕諸教授鈴川〔信一〕講師溝口禎次郎氏其他朝野の名士學者の發起に依る祝賀會は上野精養軒に於て舉行されたり、定刻過ぎ、來會者百六十名は階下大食堂に集合し開宴し、デザート、コースに入るや、發起人側を代表して正木校長祝辭を述べられ、次で大村教授の答辭あり、次ぎに特に上京參列せられたる權田雷斧師は宗教家の立場より教授を激賞し、次に又玄畫社を代表して奥宮正治氏祝辭を述べられ續いて赤羽雪邦氏等の祝辭あり、未曾有の盛會を極めたり。

⑭ 校友会文芸部発足

明治四十年代から大正はじめにかけて活発な活動を続けた校友会文学部（第二卷³⁹³、³⁹⁶頁参照）は次第に衰えたが、大正九年三月に再び文芸愛好家有志が集まり、文芸部として体制を立て直した。そこで定められた規則は次のようなものであった。